

第7回 中心部震災メモリアル拠点検討委員会

- 日 時 令和2年3月27日（金）18：00～20：05
- 会 場 市役所本庁舎2階 第4委員会室
- 出席者 植田今日子委員、遠藤智栄委員、大泉大介委員、佐藤翔輔委員、佐藤泰委員、志賀理江子委員、野家啓一委員、マリ・エリザベス委員、本江正茂委員
- 議 事 1 開 会
2 議 事
(1) 中心部震災メモリアル拠点に関する報告書の骨子について
(2) 今後のスケジュールについて
(3) その他
3 閉 会
- 配付資料 資料1 第6回中心部震災メモリアル拠点検討委員会の振り返り
資料2 中心部震災メモリアル拠点検討報告書（骨子案）
資料3 今後のスケジュールについて

○事務局（高橋室長）

それでは、定刻となりましたので、ただいまから第7回中心部震災メモリアル拠点検討委員会を始めさせていただきます。

本日はお忙しい中お集まりいただきまして、誠にありがとうございます。

本日の議事進行につきまして、野家委員長にお願いしたいと思っております。よろしく願いいたします。

○野家委員長

はい、それでは、皆様よろしく願いいたします。

世の中いろいろ騒がしくなっていますが、今日は安全距離を保って席の配置をしていただきましたので、よろしく願いいたします。

最初に会議に係わる留意点につきまして、事務局の方から説明をお願いします。

○事務局（高橋室長）

それでは、初めに傍聴の方へのお願いでございます。これは委員さん、記者さんも含めてでございますけれども、本日、新型コロナウイルス感染症の拡大防止のために、感染者と接触歴のある方、流行地域に旅行しており帰国してから14日以内の方、発熱や呼吸器症状のある方につきましては、受付で確認をさせていただいたところでございます。どうもご協力ありがとうございます。

傍聴の皆様には、本日お配りしております会議の傍聴に際し守っていただきたい事項をお守りの上、傍聴席のブースにおきましてお聞きいただきますようお願い申し上げます。

次に、配付資料を確認させていただきます。

本日は、委員の皆様のお座席に、次第と委員名簿、座席表、資料一覧、資料1から3を置かせていただいております。資料の不足がございましたら、事務局までお願いいたします。

続きまして、本日の出席状況についてご報告いたします。本日は、委員の方9名様全

員にご出席をいただいておりますことから、要項第5条第2項による定足数を満たしていることをご報告申し上げます。

また、本日も議事録を作成いたしますので、ご発言の際にはマイクを使ってお話しただければと思います。

事務局からの留意点等は以上でございます。

○野家委員長

はい、ありがとうございました。

それでは、議事に入る前に、本日の議事録署名委員を指名させていただきます。本日は志賀委員にお願いしたいと思いますが、よろしいでしょうか。

○志賀委員

はい。

○野家委員長

では、よろしく申し上げます。ありがとうございました。

それでは、議事に入らせていただきます。

まず、議題の1は中心部震災メモリアル拠点に関する報告書の骨子についてです。

今回は、これまでの議論をもとに、報告書の骨子を事務局に作成いただきましたので、それについて検討いたしますけれども、検討に先立ちまして、前回の審議の振り返りを行いたいと思います。

それでは、事務局の方から説明をお願いします。

○事務局（庄子課長）

それでは資料1「第6回中心部震災メモリアル拠点検討委員会の振り返り」に基づいて説明いたします。資料をご覧ください。

こちらは前回の皆様の発言から主なものを抜粋する形で記載させていただいております。

まず、「災害文化」についてです。本拠点が目指す「災害文化」の特質。

災害文化をゼロから考えるのではなく、既にある日常の文化を自覚することが必要。既存のパッケージとして存在するものではなく、災害が起きるたびに実践として学びながら作るもの。また、災害時に暮らし・命を守ること。災害後における暮らしの代替性を確保することなど、災害文化に様々な意味があること、そういったようなご意見をいただきました。

ハザード（危機の要素）の捉え方については、自然災害に限らず、想像力で自分と様々なハザードを結びつけることが大事であることや、都市型のビジョンとしてマルチなハザードに対応していくこと。ハザードのみならず、それに対する社会の脆弱性もセットで考えることが大事であることや、その脆弱性を乗り越えるだけでなく、受け入れることによる人間同士のケアも「災害文化」と考えれば、人類にとって普遍的な課題として発信していける可能性がある。このようなご意見をいただきました。

また、仙台市と「災害文化」の関わりについては、海も山もあって100万人規模の都市として様々な災害が起こり得ることから、ある種のショーケースとしての可能性や、既に震災を経験している都市でもあり、世界に向けて発信するにふさわしい立場である、このようなご意見をいただきました。

次に、拠点のイメージです。

基本的な展開のイメージとして、広場機能重視型というものは「災害文化」の身体化に有効ではないかというような意見もいただきました。また、様々な人が日常的に来られるようなアクセシビリティも重要ではないかというようなご意見もいただきました。

広場のイメージとしては、自由な発想によりイベントや展示ができる。普段のルーティンと3.11で変転できるような空間。一見何もなくとも、そこに想像力を担保できるようなもの。アーカイブされた記憶にいつでもアクセスできる雰囲気を持つ空間。このようなご意見をいただきました。

また、仙台市内において広場機能を持つほかの構想と協調することも大事ではないかという意見もいただいております。

次に、「人」の重要性についてです。

人を介してつながっていくような伝承が大切。また、現場性を持たない中心部において伝承の“よすが”となるのは人間的な要素で、必要な情報を聞いて集めて訳し、渡す人のチームが大切であるというご意見もいただいております。

それから、各地の施設や人をつなぐコーディネーターが大切であること。運営の担い手や地域のサポート、それを育てることが大事であること。こういった意見をいただいております。

次に、拠点の役割、機能についてです。

拠点の役割は、体験者が減る中で経験を継承する拠り所、中心的な柱に本拠点になること。また、経験の共有・蓄積・発信だけではなく、「新たな知恵の創造と社会への実装」これを通じて、災害とともにある社会の姿を描き、自ら実行して世界に発信するという高い志を持つのが本拠点。そして、これからの都市は災害をきちんと引き受ける姿勢を持ち、そのために本拠点のような場がないといけないという、そういった普遍的な取り組みの先駆けになるべきではないか、こういったご意見をいただいております。

また、拠点の機能として、「新たな知恵の創造と社会への実装」という場は多様な人が集まり、活動するクリエイティブな空間。そして、市民や大学等と連携した研究機能が必要。また、アーカイブについては「3がつ11にちをわすれないためにセンター」など、仙台市として震災の記録は既にたくさんあるという認識のもと、それらを充実させて育てていくことも軸に考えてはどうかと。そして、市民が記憶を託す拠り所とすることで、市民と拠点との関係性をつくり、様々なハザードへの思考の入り口とすべき。また、震災伝承を担う人は市民活動の担い手と重なることから、市民活動スペースをあわせ持つことも必要ではないか。こういった意見をいただいております。

最後に、拠点の立地場所のイメージについてです。

それは、災害文化を持つ仙台をシンボリックに伝える場所。また、都市アイデンティティの構築に向けた決意や覚悟を表す。既存施設や既にある人通りなどの「まちの文脈」を活用し拠点を育てられる場所として、旧城下町エリアですとか東部地域との差別化を図るという観点からJR仙台駅より西側ではないか。都市としてシンボリックなものを作る、多様な人が集まる要素を備える、財源や持続性、市民活動との担い手の共通点、こういったことから、震災メモリアルだけではなく他施設等の重ね合わせによる立地を考えるべき、こういったご意見。そして、震災を経た仙台市が対外的に発信するという趣旨から、市役所周辺ですとか広場性を持つこと、あとは音楽による復興という文脈から音楽ホールとの関連づけなどのご意見もいただきました。

以上です。

○野家委員長

はい、ありがとうございました。

ただいま、これまでの審議の振り返りを資料1に基づいて報告していただきましたが、何か委員の皆様からご意見、ご質問等ありましたら、何でも結構ですのでお願いいたします。

よろしいでしょうか。後で、いろいろ審議すべき事項が山ほどありますので、とりあえず先に進ませていただきます。

それでは、本日のメインテーマであります報告書骨子の検討に移りたいと思います。

この骨子は、事務局がこれまでの議論を整理し、再構成しているものです。分量がありますので、項目ごとに話し合いたいと思いますが、全般的なことへのご意見については最後にお伺いしたいと思います。

それでは、骨子の全体構成と項目1・2について、事務局から説明をお願いします。

○事務局（庄子課長）

それでは資料2「中心部震災メモリアル拠点検討委員会報告（骨子案）」をご覧ください。

初めに、骨子の全体構成を説明いたします。目次のところをご覧ください。

1番が「検討の前提」、2番が「東日本大震災が持つ意味：本拠点の検討に当たって」というところで、本拠点を考える前提になる条件をご説明しております。

具体的には、「検討の前提」のところは、東日本大震災の概要ですとか以前のメモリアル等検討委員会で提言されたメモリアル拠点の位置付け、また、他災害のメモリアル施設の状況や本市内における震災伝承に関わる取り組みの状況など、こちらを説明いたします。その上で、東日本大震災の持つ意味、例えば東日本大震災がもたらした経験が持つ意味ですとか仙台において考える意味、こういったものを前提としてご説明しております。

そして、3番、4番、5番、この3つで拠点の中身の説明をしております。3番「本拠点が担う“震災伝承”」、4番「本拠点が持つ性格」、こちらで基本的な役割や拠点の性格。そして、5番「拠点の展開イメージ」が拠点の中身のところになります。

最後、6番「今後の具体化に向けて」で、立地の基本的要件や今後の検討課題をご説明いたします。

それでは最初に、この前提条件と申しました1「検討の前提」と2「東日本大震災が持つ意味：本拠点の検討に当たって」を説明させていただきます。

1番「検討の前提」です。四角く囲んでいるところは、1番で説明をする内容です。本拠点の位置付けを考える上で、震災の概要とこれまでの検討における位置付けなどから整理する。まず、震災の概要、メモリアル拠点の位置付け、他災害の施設の状況、本市内の取り組みの状況を1番で説明いたします。

そして、2番は「東日本大震災が持つ意味」です。「現場」とは異なる本拠点の検討にあたり、対象となる「東日本大震災」とは何だったのかについて、震災という経験全体が持つ意味合いと、それが仙台との関わりにおいて持つ意味、こちらを整理いたします。

東日本大震災がもたらした経験が持つ意味としては、これまでもご意見いただいておりますように、広域性、複合性、原発など多様な災害であり、それと同時に多様な経験があること、一人一人で異なる被災の様相や経験が持つ意味を考察いたします。

そして、この東日本大震災は社会のあり方を問うものであったこと。自助・共助・公助のあり方やエネルギーや情報の途絶など社会システムの脆弱性など、世界史的・文明

史的な課題をはらんでいたことを考察いたします。

そして、記憶や経験を伝えることの重要性と困難さ、これまでも災害が繰り返されてきたにもかかわらず、このようなことがあった、そういった困難さの課題のところを考察いたします。

2番「仙台において考える意味」です。このような震災の経験を仙台市で扱う意味を考える場合に、都市の性格として、貞観地震など繰り返してきた災害の歴史があったこと、まちづくりを担う市民力で諸課題の克服してきたこと、東北の拠点としての知的・経済的資源の集積という都市特性、交通のハブであると同時に、たくさんの人が集まる経済的にも文化的にも集積する都市という特性があること。そして、この東日本大震災が契機となった発信、例えば国連防災世界会議ですとか「仙台防災枠組」が採択されていること、これをもって国内外の災害へ貢献していることなど、こういったことを考察いたします。

1番と2番で考察する内容は以上です。

○野家委員長

はい、ありがとうございました。

今、骨子案の1と2について説明をいただきましたが、これから順々にいろんな論点が出てくるかと思いますが、1つは、これまでのこの委員会での議論との整合性がとれているかということ。そして、この骨子案の流れがちゃんと論理的に整合的であるかということ。委員会で話題になったけれども抜け落ちている論点がないかどうかということ。その辺を念頭に置いて検討いただければと思います。

それでは、1「検討の前提」と2「東日本大震災が持つ意味：本拠点の検討に当たって」に関して委員の皆様からご意見、ご質問あるいはご提案等ありましたらお願いいたします。

○本江副委員長

皮切りで少しお話をしたいと思いますが、特に2の(2)の仙台でこれをやる意味というところですが、①から④に整理をしていただいて、概ねこういうことだと思いますけれども、ちょっと議論のときよりはトーンダウンしていると感じますので、もうちょっと強く言ってもいいのではないかと思います。やはり人類的な規模の災害があり、その中心都市であって、その災害を引き受けてきた。そして、こうしたことに対応していくことで、後から議論あると思いますけれども、「災害文化」を持つ都市として引き受けていく、仙台市のアイデンティティという言葉を何度か使っていたと思います。責任と自負を持って我々はこれをつくるのだという、都市の新しい役割としてもっと強いステートメントをもってやるのだという議論をしていたと思います。何か巻き込まれてしようがなく作るということではなく、これを奇貨として、より強い都市に再興していくためにやるのだと。

災害の多い都市と言われることが、決してネガティブなことなのではなくて、災害はあるのであって、これに対してきちんと備えて対応する文化を持っているまちであるということはむしろメリットだと。投資などに対してメリットがあるいい都市ですと言っていく何かステートメントのようなことがここにうたわれていいのかなと思いました。

新しい項目を足すというよりは、もう少し言葉遣いで自負を込められるといいのではないかなという感じです。

○野家委員長

今、副委員長からご指摘あったように、この仙台として考える意味というのは、もう少しアピールしてもいいかなと僕も感じていました。

さっき人類規模の災害と言っていましたけれども、原発事故を含めれば、それこそ世界にめったにないような複合災害だったわけです。そして、さらに地震だけを取ったとしても、1000年前の貞観地震あるいは400年前の慶長地震と、繰り返し仙台地区、東北地区を襲った。あと、津波に関しては、明治三陸大津波から昭和津波、チリ地震津波まで加えることもできる。そういう災害を繰り返し受けてきた地域としての、さっき責任と自負という言葉が本江先生から出ましたけれども、それを担っている中心都市であるというアピールというか、それをもうちょっと強く打ち出してもいいかなと私もそう考えました。

ほか何かご意見ありましたら。はい、どうぞ。

○佐藤（翔）委員

1の「検討の前提」のフレーズだけの問題なのですが、(2)と(3)ではメモリアルという言葉を使って、(4)では伝承という言葉を使っているのですが、より広義の言葉を使った方がいいと思います。その方が活動に幅が出てくると思います。仙台市の場合、今までメモリアルという言葉が使われていたので、私は震災メモリアルで統一してもいいような気がします。

もう一つ、大きな2番の持つ意味のほうなのですが、ちょっと難しいのが、多様な災害のところに関連してくるのですが、東日本大震災の意味の1つとして、あまり使いたくはないのですが、「想定を上回った」という部分を使ったほうがいいのかどうかというところですね。ちょうどその直前ぐらいに慶長や貞観のことがわかったということもあって、想定していなかったというのは嘘になるんですけれども、多くの方が明治三陸や宮城県沖をベースに考えていたところに、そうじゃないのが来たということも、東日本大震災の持つ意味だと思うので、1の中になるのか、0になるのか、4になるのかはわかりませんが、東日本大震災の持つ経験の意味の1つとして加えていただければと考えました。

以上2点でございます。

○野家委員長

はい、ありがとうございました。一つは震災メモリアルと震災伝承、そういう言葉遣いの問題。これまでこの委員会でも使ってきた震災メモリアルという言葉のほうが、より実態を捉えているのではないかというご指摘でした。

それからもう一つは、地震にせよ津波にせよ、我々は当時「想定外」という言葉が使われたのですが、少なくとも我々の予想をはるかに上回る災害であったということ、どこかで念頭に置いたほうがいいのか、そういうご指摘でございました。ありがとうございました。

ほかにごございましたら。はい、どうぞ。

○佐藤（泰）委員

本江先生のご意見に関連してなんですが、この2で「仙台において考える意味」というのを考えるときに、そもそも1のようなすごく大きな課題であるとか問題設定の仕方

とか、それをかなり抽象的なところまで踏み込んだようなテーマをここで捉えていると思うんですけども、そういったかなり大きくて深い問題について、真正面から取り組むという覚悟を示そうとするのが、仙台の特徴でもあるのかなと私は思っているんです。1番と2番を並列させてしまうと、何か2つの別々のことのようにになってしまう気がするんですが、1番で書いたことを受けて仙台はこれに向かっていくというようなことをもうちょっと明確に出すことによって、その覚悟であるとか思いであるとか、仙台の特徴みたいなことを打ち出せるのかなという気がしました。

○野家委員長

はい、ありがとうございます。大変重要な指摘だと思いますが、2番目の(1)で提起された問題、それを仙台が真正面から引き受けていくという覚悟を示すような構成にするのが望ましいのではないかというご指摘でした。大変重要な指摘であろうと思います。ほかに何か。はい、大泉委員、どうぞ。

○大泉委員

先ほどの翔輔委員の意見とほぼ重なるんですが、大きい2番の(1)の①で「多様な災害」という言葉を聞くと地震、津波、火山噴火のような多様な災害とってしまうんです。「多様な災害」と「多様な経験」と言葉を並べたくなる気持ちもわかるのですが、今回の意味は、災害の多様な側面というか、意味合いが多様だったということなんだと思います。なので、ここを「多様な災害」と言葉をきれいに並べるよりも、多様な側面があって、そこにはひとつ想定を上回る被害の甚大さというのがあり、広域性があり複合性がありということかなと感じました。

○野家委員長

はい、ありがとうございます。2の(1)①で、多様な災害、多様な経験と、多様なという言葉が使われているのですが、そういうふうきれいにまとめてしまうと、せっかくの様々な経験が平板になってしまうので、もうちょっとメリハリをつけて、多様の中身を記述するようなものであってほしいというご意見かと思います。これも重要な指摘だと思います。

ほか、よろしいでしょうか。あまり1つのチャプターにこだわると先に進みませんので、次に行かせていただきます。

項目の3番目、本拠点が担う「震災伝承」。これは「震災メモリアル」とするかどうか、あとでまたご意見いただきますが、項目3について事務局の方からご説明をお願いします。

○事務局（庄子課長）

はい、それでは3番「本拠点が担う“震災伝承”」についてご説明いたします。

ここは、次の4番「本拠点が持つ性格」と「展開イメージ」で役割と機能を説明する前段として、1番、2番の流れを受けて整理をするものです。

四角囲みところですが、今回の震災とそれが仙台にとって持つ意味を踏まえて、本拠点が担う「伝承」の性質を整理する。

1番はテーマ。震災の経験と教訓を理解し、災害に対する「社会のあり方」を考える、ということであると考えます。これは、多様な経験を理解する、様々な教訓から学ぶ、社会のあり方を考える、そういったようなことがテーマになっているということです。

そして、次は文脈。「仙台のまちづくりの歩み」の中で考える。災害の経験や市民の知恵を歴史の中に位置付けることや知恵を受け継ぐこと、新たな市民文化としていくこと、こういった文脈の中でこれを考えていくこと。

そして、3番、手法として、想像と創造、イマジネーションとクリエイションを通じて「知恵」を生み出し、継承し、発信する。多様な経験、他の災害、他の時代から学ぶ、自分とのつながりを想像する、これからの知恵を創造する。そういった手法が考えられます。

そして、中心部という特性を生かす。中心部は、非現場性、拠点性、ショーケースとしての仙台の特性、こういったご意見をいただいております。このことから、東日本大震災を中心にしつつ、様々な災害への視野を持つ。また、東北の被災地へのハブ機能、様々な連携の核となり得る。そして、都市のビジョンの発信やメッセージ性を担える。こういう現場性を持った伝承施設とは異なる独自の役割と指向性を持った「伝承」、これが「本拠点が担う“震災伝承”」であると考えます。以上です。

○野家委員長

はい、ありがとうございました。ただ今、3「本拠点が担う“震災伝承”」について、4つの小項目をそれぞれご説明いただきましたが、委員の皆様からご意見あるいはご質問ありましたら、よろしくお願ひします。はい、佐藤委員、どうぞ。

○佐藤（翔）委員

もしかして議論の中で取捨選択した中で取り除かれたかもしれないんですけども、この中で一番関連があるのが(1)なんですが、フレーズとして経験を理解する、教訓を学ぶ、考えるということで、基本的にはインプットとか、頭の中に取り込むみたいなイメージが強めかなとは思うのですが、できればその人の血となり肉となってほしいなというところがあって、身につけるといふ部分が役割としてほしいと思っています。

最初の1回目とか2回目との議論のなかで、具体的な言葉として出てきたのは、「生きる力」みたいな言葉だったと思うのですが、そういった災害を乗り越えるための能力が身につけられるみたいなところが、防災屋としては大事ななと思っています。もしかしたら、どこかに書いてあるのかもしれないのですが、私が気付かなかったので、今のような追加の提案をさせていただきます。以上です。

○野家委員長

はい、ありがとうございました。震災の経験と教訓を理解するというのは、単に文字面で理解するのではなくて、後で身体化という言葉が出てくるかと思うのですが。

○佐藤（翔）委員

そうですね。失礼しました。

○野家委員長

身につける。それで身についたうえで、それが次の世代の生きる力になる。あるいは今の佐藤委員の言葉では災害を生き抜く能力になって蓄積されるというか、そういう点をもうちょっと強調したほうがよろしいのではないかという、これも的確なご指摘かと思ひます。

ほかに何かございますか。はい、どうぞ。

○本江副委員長

今の佐藤先生の意見に重ねてですが、(1)も(2)も「考える」というように、考えて終わるとなっていますが、考える、学んで上で、さらに新しい行動を生み出すというか、帰ったら何かをするとか、ここで何か考えたことが仙台の政策になったり、何らかの活動として実現されていくということを結構言っていたと思います。考えると続くとお勉強施設という感じになってしまいますので、もう少しアクティブなものであるというニュアンスが出したほうが良いと思いました。以上です。

○野家委員長

はい、ありがとうございます。確かにそうですね、単に学ぶや考えるじゃなくて、それを具体的な行動に結びつけて発信するというか、そういう側面をもう少し強調したらいいのではないかとのご指摘でした。

ほかにございましたら。はい、志賀委員。

○志賀委員

同じ流れで、伝承となったときに、やっぱり聴く人がいないとそれが伝承されていかないので、考えるよりも前に、まずそれをどう聴いていくかというのを少し加えるといいのではないかと思います。

○野家委員長

はい、ありがとうございます。考えるその前のステップをもうちょっと具体化する必要があるということですね。

ほかにございますか。もしよろしければ、一応全部説明した後でまた全体に振り返って、整合性とか抜け落ちている論点とか議論をしたいと思いますので、とりあえず次のCHAPTERのほうに進ませていただきます。

4 番目「本拠点が持つ性格 “災害とともに生きる社会” の創造の拠点」です。それでは、お願いします。

○事務局（庄子課長）

はい、それでは、4「本拠点が持つ性格」についてご説明いたします。

四角囲みのところ、このような「伝承」、この1番、2番を受けた3番、このような「伝承」を進める場として、本拠点が持つべき基本的な構成を提案する章です。

東日本大震災の経験と教訓を継承することはもとより、時代や地域の違いを超え、時代にふさわしい形で将来の災害を乗り越える知恵を新たに創造し、伝えていく。また、仙台の持つ歴史や市民に受け継がれてきた「市民力」や「知恵」などを、未来の市民に伝える文化として継承、発展させる。これが目的になります。

この目的の中のキーコンセプトです。震災の経験に基づいた災害とともに生きる都市文化の創造と継承。これは、災害とともに生きる社会のあり方及びそうした文化を持つ都市仙台を継承・創造することを整理しております。

なお、キーワードです。「災害文化」とございます。災害文化という言葉はここで初めて使いますが、事務局ではこれまでの議論を踏まえて、「災害の経験を契機に、災害を完全に避けることはできないことを認識した上で、災害に遭遇した際、社会システムの破綻を最小限度に食い止め、人々の生存可能性を高める文化」と、現時点で定義しており

ます。

3番、基本的役割。3つございまして、1つ目が、震災の記憶の身体化を通した「超長期にわたる記憶の保持」。次に、協働による「知恵の創造と社会への実装」。最後に、経験と教訓、知恵の「内外への発信とそれによる貢献」。こちらが基本的役割になります。

キーワードといたしまして、「身体化」という言葉が出てまいります。事務局ではこれまでの議論を踏まえて、「日常的に繰り返し五感を作用させることなどを通じて、それと意識せず震災の記憶を個人、ひいては社会の認識として定着させていくこと。また、そのことを通じて、いざというとき記憶を想起し、判断や行動をとれる状態にすること」と定義しております。

こういった役割を持つ拠点の性格です。1つ目、活動の中から創造的なものが生み出される場としての性格。2つ目、多様な人が集い、交流する場としての性格。3つ目、震災や伝承に関わる様々な場や施設とのネットワークの拠点としての性格。そして4つ目は、この1番から3番を補完する一定の「ミュージアム・アーカイブ機能」としての性格。5つ目、時間がたっても震災の伝承の拠点として想起される拠り所、シンボルとしての性格。6つ目、震災の経験を起点とする仙台のまち・市民のアイデンティティとしての象徴的な性格。このように整理いたしました。以上です。

○野家委員長

はい、ありがとうございました。この項目にはいろんなことが出てきています。特に「災害文化」と「身体化」という2つのキーワード。これまでの委員会でもいろいろ議論されてきましたけれども、まだ具体的な定義を提示するまでには至っていないと思うのですが、新たにこういう災害文化とか身体化をどういうふうにもこの報告書の中で定義するかということも含めて、委員の皆様方のご意見をいただければと思います。どの項目からでも結構です。はい、佐藤委員。

○佐藤（翔）委員

災害文化の内容の定義の文ですけれども、もしかしたら完全に学術的な意味とは違うのかもしれないけれども、災害を避けることも災害文化なんですね。災害を避ける場所に住む、災害に遭わないように最初に避難していくみたいなのところも災害文化に入ってきます。今すぐに具体的な文言は思い浮かばないんですけれども、起きて被害を被ったからの部分だけではなくて、そういう未然に防ぐみたいなのもここに入れられたらなという提案でございます。以上です。

○野家委員長

はい、ありがとうございました。はい、大泉委員、どうぞ。

○大泉委員

2つです。まず、1ページ目にある目的のところ。先ほどの3で出てきた「考える」という部分と同じ傾向が見られるんですけれども、何となく文化としてこういったものを継承・発展させるようになっていて、その先に担い手を育てるとか、そういった人たちを増やすというニュアンスが必要なのかと思います。何となく目に見えないものがあるのではなくて、それをちゃんと自分のものとしてくれる人たちが増えるというのが多分ゴールだと思うので、例えば黒丸2つ目でいうと、最後のところを、継承、発展させ、その担い手を育てるとか増やすとか、人を育てる、担い手を育むというそういった感じ

のニュアンスがあってもいいのかなと思います。それが何かさっきの「考える」だけではないことと何となくシンクロするのかなと私は理解しました。

それからもう一つが、2 ページ目の災害文化のところなんですけれども、先ほどの被害を避けるというのもあるというのはそのとおりだと思いますけれども、後段のところにある「災害に遭遇した際に社会システムの破綻の最小限化と人々の生存可能性」という表現ですが、これ好き嫌いあると思うんですけれども、僕は社会システムの方を先に出されると何だかなという気がします。やっぱり人々の生存可能性を高めて社会システムの破綻を最小限化という順番ではないかと思います。世の中のために人々が犠牲になっていいと捉えられなくもないと思うので、順番をちょっと変えた方がいいと感じました。以上です。

○野家委員長

はい、ありがとうございます。1 つは、この委員会でも人を育てることが非常に重要だということが指摘されてきましたけれども、単に学んだり考えたりするだけではなくて、災害文化を担う人たち、担い手を増やしていく、育てる観点が必要ではないかということと、それから、社会システムという言葉が出てくるのですが、これをあまり前面に立てると本末転倒になりかねないので、あくまでもその結果として社会システムの強化とかそういうことにつながるように議論を進めていったほうが良いという、ご指摘でした。

ほかに何かございましたら。はい、遠藤委員。

○遠藤委員

2 ページのキーワードの1 と2 の災害文化と身体化ということですが、今みなさんとお話しているのは、いわゆる仙台ならではの災害文化と身体化を言語化することでお話しているかと思います。ただ、一般的にも使われているので、その一般的な用法・意味と仙台で私たちが考える意味が結構差があると、言葉は単語だけで歩いてしまいますので、その都度オリジナルの意味を付記しておかないと本当の意味が伝わらないということになると思います。ですのでその点にも留意しながら、通常はどういうふうに使われていて、仙台ではあえてこういうふう工夫して使っているということをあえて表現し続けないと、この災害文化と身体化ということの仙台らしさというのは伝わらなくなるので、ここの使い方は注意すべきかと思いました。

もう一つですが、身体化、(3)の基本的役割というところで、①震災の記憶の身体化を通した「超長期にわたる記憶の保持」ということで、これまでの委員会の中でも、超長期にわたる記憶の保持に関わる文脈で、地域としてとか、あとは地域に残る何かものとして超長期に伝えるというご発言があったかと思うんですね。その時にキーワード「身体化」と出ているものの意味を考えると、身体化を通した超長期にわたる記憶の保持と記載すると手法として少し狭められていると感じます。身体化ではない、ほかのいろんな要素も、超長期にわたる記憶の保持に入ってくるのではないかなと思いましたので、①の書き方、超長期の前の表現をもう少し工夫できるといいかなと思いました。

○野家委員長

はい、ありがとうございます。1 つは災害文化と身体化ということ、この委員会では何か我々共通の理解があるような言葉として使っていますけれども、一般の方々にはなかなか通じない面があります。また、その意味の捉え方が食い違っているところもあ

るので、この報告書ではその辺のギャップを考えながら、きちんと言葉の意味を説明しながら進めていくことが大事だということですね。

それから、身体化というのはそれだけ孤立している概念ではなくて、ほかのいろんな要素と組み合わされて初めて意味を持つ概念なので、そこら辺をしっかりと記述する必要があるのではないかというご指摘でした。

いずれも重要なことだと思いますが、身体化を一番強調されたのは志賀さんだったと思いますが、その辺についてコメントをいただければ。

○志賀委員

被災のレベルがそれぞれ違うけれども、人々がどういう体験をしたかということは、あらゆるメディアを通じて知ってきて、たくさん残されている。それは、他者の目線に立つという意味を持っていますよね。だから、困難に向き合う様々な知恵を体で獲得するようなことだと思います。身体化は、言葉だけに記録されているものだけではなくて、体を信じるというようなことを言っていると思うのですけれども。

でも、その1つ前の災害文化と少し通じていることとして、災害文化の「文化」、文化とは人々の日常生活ということだと思うんですけれども、実はそれは人工的なもので、昨日と変わらない今日、今日と変わらない明日、そのような日常を人間社会が作り上げてきたということがあっても、自然の世界はそんなことないわけで、すぐほかの動物に捕食されるかもしれない。人間の社会の中では揺るぎない「日常」が強く土台としてあったけど、震災を通じて未来は予測不可能だと再確認して。だから、自然にどう向き合うとか、人間の存在とは？という根本的な問いとともにある社会のあり方、日常生活というものが災害文化の中で非常に大事なんだと思います。だから、災害文化とは、このキーワード1にある、人々の生存可能性を高める文化という言い方でないような気は少しします。

○野家委員長

はい、ありがとうございます。今、大変重要なご指摘いただいたと思います。災害文化と言ったときに、やっぱりその根底にあるのは人々の日常生活だと。しかも、震災によって、今日の続きが明日だと思っていた日常生活が断ち切られたわけですね。ですので、災害文化というのがあるとすれば、その時断ち切られた日常を出発点にして、自然とは何か、人間とは何かという根本的な問いを突き付けられ、その上にもう一遍、日常生活を再建するということをこれまで9年間ぐらいやってきたわけですけれども、そういう自然や人間への根本的な問いを基盤にしたライフスタイルというか、それが災害文化につながっていくのではないかという話だと思います。今のご指摘は災害文化を考えるうえで重要なポイントになるかなとお聞きして感じました。

○志賀委員

あと一個だけ付け加えさせてもらいたいのが、「復興」という言葉を考えたときに、より完璧に元どおりに、豊かに、みたいなイメージが非常にあっても、災害文化とはそういう意味ではないですよ。私的に、震災が起きたあの日の出来事というのはとても大きなことなんですけど、それよりももっと強烈に翻弄されたのはその後です。復興という名の元に行われた数々のことによりかなり混乱してしまったというところがあるので、その部分をそういう根本的な問いとともに向き合わない、もっと豊かにという発想だけで終わってしまう。だから、命とか、そういうものから手綱が離れないといいと思

っています。

○野家委員長

はい、ありがとうございました。復興ということが叫ばれたし、今もオリンピックに絡めて復興ということが脚光を浴びていますけども、単にそれは元に戻すとか、より豊かになるとかということではなくて、さっき言った日常のライフスタイルというものをもう一遍考え直すというか、別の形で組み立て直すというか、そういったところにつながらなくてはいけないというご指摘かと思いました。

○佐藤（翔）委員

今の志賀委員の話にとっても私も感銘を受けまして、被災した後の生活の再構築みたいな部分が確かにこの中に入ってなかったのをご指摘で気づきました。そういった意味で、キーワード①に無理やり盛り込むという戦略もあれば、やっぱり違う項として立てなければいけないぐらいの大きな影響を持っているかと思います。

あと、今の災害文化と身体化の話で、最初のほうの志賀委員の話からすると、もしかしたら身体化のほうが先のほうがいいのではないかなとも思ってきました。やっぱり人間からの文化なので、この順番についてもちょっと考えなければいけないなど。

あともう一つは、順番もあれば、両輪だとすると、何か言葉遊びばかりで恐縮ですけども、「文化化」という言葉もいいのかなど。身体化というのはプロセスですね。文化化というのもプロセスなので、プロセスベースでフレーズを揃えると美しくできるのかなと。その反対の言葉で社会化という言葉があるんですけども、要はどんどんシステム化されていって人間の身にもならない、文化にもならないという、若干侮辱したような言葉があるんですけども、そういう言葉を組み合わせるといいのではないかと思いました。

○野家委員長

はい、ありがとうございました。まだ少し時間がありますが、はい。

○大泉委員

私も翔輔先生と同じことを考えていて、「災害文化」というものがあるのではなくて、「災害文化化」していきたいという、そこに向かっていくということを考えると、「身体化」が個々に先にあり、それが世の中に皆がそれをやることによって文化として根付いていくというか育まれていくという文脈なのかなと。身体化は、すごく乱暴な言い方をするとひとりでもできるけれども、文化化はみんなと一緒にじゃないとできないみたいなのが、僕の理解でした。

それで、災害文化のところの暮らしのこととか、ただ単に生存者増やして破綻小さくということだけじゃなくて、この暮らしをどう守れるか、つないでいけるかというところで、へこたれない感とか、踏ん張れる感とか、世の中がポキッと折れないで踏ん張るとか、戻ってくるとか、そういう感じが災害文化なのかなと感じていました。以上です。

○野家委員長

はい、ありがとうございました。いろいろ重要な意見を出していただきましたが、まだ植田委員とマリ委員からご発言がないようなので、この4のところについて、一言ずつでも結構ですが、何かコメントをいただければありがたいと思います。とりわけ災害

文化と身体化ということで今まで議論になってきましたが。

○植田委員

そうですね。この両輪だというふうにおっしゃっておられたご意見がありますけれども、確かにこのメモリアルというのはそういう両輪になっているかなと思います。

ただ、この順番としては、私は災害文化が先に来たほうがわかりやすいというふうに思っています。それはなぜかという、身体化とは何かというときに、例えば津波常襲地とかで津波からの避難とかを身体化するといったときに、高いところに逃げるとか、そういったものを組み込んだお祭りをつくるというふうなことが行われていますけれども、仙台市の中で考える身体化というのはそこがちょっと違っていると思います。津波常襲地のような海岸に住むと、自然が露出しているような場所で身体化していくということをイメージするわけですが、この災害文化を都市で考えるということがすごくチャレンジングで、都市の中で災害文化をいかに作っていけるかということ自体があまり今までされてこなかったことですし、このメモリアルの特徴でもあるんじゃないかなと思うんですね。

そう考えたときに、この災害文化というものをいかに入力できるか、それがその身体化というところに関わってくると思うんですねけれども、実際に高いところに走ったりという身体化というものではなくて、災害文化というものをいかに日常化したりとか、入力できるかというところが、都市だからこそ難しいという部分があるんじゃないかなと思うんですね。

ですから、災害文化の説明のときに、都市では災害文化が作りづらかった、あまりにも複合的だし多様だからというところがあると思うんですねけれども、そこにちょっと言葉を尽くした上で、その身体化というふうに考えるほうがわかりやすいかなと考えました。

○野家委員長

はい、ありがとうございます。これも大事なことです、つまり仙台市という 100 万都市の中で災害文化というものを考える手立てというか、それをどうするかということが重要だ。沿岸部であれば昔から「津波てんでんこ」などという伝承があつて、それも身体化の一環だと思うのですが、ただ都市だと、植田さんが言ったように、いろんな災害や危険が複合的に襲ってくるわけで、その中での災害文化をどう考えて、都市と災害文化をどう結び付けていくかということが大事だというご指摘かと思いました。マリ委員、どうぞ、お願いします。

○マリ委員

全体的な印象なんですけれども、こういうものを作るとこういう社会がすぐできるという流れになりますけれども、本当はどういう役割を持つか、悲しいことを経験したり、何かを失った人の経験を記録するというのを、もう少し強めに入れてもらった方がいい。どういうふうに社会をつくるということより、最初に記録をきちんとするというのをもう少し加えてもいいかなと思いました。

○野家委員長

はい、ありがとうございます。こういう報告書だと、結局どういう社会をつくるかということが目標にされるんですけども、その前に、9 年前の災害の経験がそれぞれあ

るわけですから、その経験の蓄積をまず重要視して、その上であるべき社会が見えてくるならいいけれども、あまり最初からこういう社会が望ましいというふうな報告書にしちゃうと、多分上滑りの議論になってしまうのではないかという、これも大変重要な指摘かと思いました。はい、佐藤先生。

○佐藤（翔）委員

植田委員のおっしゃったことにまた触発されてなんですけれども、やっぱり従来の災害文化では難しい、チャレンジの部分があることをおっしゃっていただいたので、いっそのこと「災害文化」という言葉をやめて、都市災害の文化として「都市災害文化」というのもありかなと。ジャストアイデアで申し上げますが、そうすると、さっき遠藤委員が言っていた災害文化という言葉はどっかに既にあると、そういう言葉だけが独り歩きしたりすると、違う言葉をつくるのも手かなと思うんですね。ここで仙台という都市でフォーカスするのであれば、「都市災害の文化」「都市災害文化」というのもありかなと思いました。以上です。

○野家委員長

はい、ありがとうございました。はい。

○佐藤（泰）委員

「都市災害文化」というのもあるかなと思うんですが、広域性を含め今回の震災の規模に対して仙台として向き合うときに、都市と言ってしまうと少し限定されるかもしれないということが気になります。

それはともかく、志賀さんの話に関連するんですけれども、震災の直後によく言われたことで、社会システムが奪われたことによって、素の人間性をもう一回再発見したと感想を述べる人がいるんですね。すごい被害を受けたことはちょっと置いておいてなんですけれども。

そういう人は被害がなくてよかったねって言われる場合もあると思うんですけれども、私はすごく重要なことだと思っていて、被災というのはいろんなレベルがありますけれども、要するに社会システムみたいなものが無くなることによって、自分でやらなければいけないこととか、その代わりに、それがなくなるときにじゃあどうするのかみたいなことというのはやっぱりそれぞれ突き付けられて、それをやることに向き合って、改めて自分の人間性みたいなものを再発見するという面も否定できないと思うし、そこから出発することというのは、あれだけの大きな災害や犠牲に対して得たものとして、すごく重要だと思うんですね。

便利さと裏腹にブラックボックス化した社会システムが機能しなくなったときに、我々がどうなるかということを経験する中で得た、人間性の再発見みたいなことが、私は災害文化としてすごく重要なことだと思っています。それをずっと言い続けるということやそこから出発するということは、高度に近代化された今の社会に対するオルタナティブなあり方について考える時のすごく重要な足がかりになり得るものだと思います。その中でどうやって自分たちが生きていくのかとか、そこでどんなふうに関係を作るのかみたいなことへの、それぞれのシミュレーションが蓄積され「身体化」されることで、未知の脅威へのセーフティネットが常に更新されていくようなことや、過去の経験から導かれるノウハウの総体が災害文化ということになるのかなという感じがしています。

○野家委員長

はい、ありがとうございます。最初の方で、さっき翔輔委員からあった「都市災害」というふうに限定すると狭くなりすぎる気がしました。やはりこの拠点というのは、東日本大震災全体を俯瞰するというような役割も重要な視点として持っているので、都市災害というふうに限定しちゃうと、ちょっと津波とか原発事故とかいろんな側面が抜け落ちちゃうかなという気はしています。

それから、「都市災害」だと、阪神・淡路大震災の方が、ある意味ではそのことを正面から扱う役割を持っているかなと。東北の場合には、やはり農村とか漁村とかあるいは森林とかそういった様々な側面が組み合わされている。それこそ複合的な被災だったわけですので、一項目として都市が入るのは賛成なのですが、そこを強調しすぎるとちょっと本末転倒になるかなという印象を先ほど受けました。

○志賀委員

植田さんの都市における災害文化をどうつなげて考えるか、を考えたときに、都市災害文化だとかなり狭くなってしまふのは私も同感です。それで、身体化と言って私が想像するのは、都市でみんなが使える公共の場所、道や公園などに記憶の痕跡となるようなものがあって、仙台に来た時にそれが目に付くところにあるとか、日々目にするようなことかとも思います。

私が普段の中で目にして、これはすごく自分の体に響いてくるものは、電信柱にある津波がここまで来ましたという表示です。あれは沿岸部でしか意味がないけれども、あのようなアイデアを街なかに持ってくるようなことで、例えば、個人が提供してくれる家の壁に壁画を描くようなこともありますし、そのように身体化が何によって起こるかということを加えるといいのではないかと思います。

○野家委員長

はい、ありがとうございます。まだまだ議論はあるかと思いますが、一度全体を通して見る必要がありますので、5番目の拠点の展開イメージについて、事務局の方からご説明をお願いします。

○事務局（庄子課長）

はい、それでは5番「拠点の展開イメージ」について説明いたします。

四角囲みの中をご覧ください。この章では、拠点の基本的な構成イメージをもとに具体的な展開イメージを整理します。

1番「機能」です。機能は大きく2つ書いております。日常での記憶の継承のための機能。それから、新たな知恵の創造と実装のための機能です。

日常での記憶の継承のための機能は、日常の中で震災の記憶に繰り返し触れ、過去と現在、未来を想像する仕組みとするために、市民が日常的に行き交う場所に震災の記憶の拠り所となるシンボルと記憶の集積の場を設けるということで、想定される機能が4つあります。

1つ目「広場機能」。人が日常的に集い交流する、追悼などの場となる。2つ目「シンボル」。震災の経験を想起する、震災全体を表象する、モニュメント、音など。3つ目「アーカイブ」。震災の記憶を蓄積する、市民の共有財産とする、記憶を託す拠り所となる、新たな知恵の創造を支える、各地のアーカイブと連携する。4つ目「展示」。震災の記憶

を想起する、都市の歴史との関わりを意識する、他被災地へのインデックスとなる。こういったような機能を想定しております。

次に、新たな知恵の創造と実装のための機能。これは震災の経験と知見をはじめとする様々な災害などへの想像力などを通じて、これからの災害とともに生きる社会やまちづくりに生かすことのできる知恵を生み出すとともに、教育や文化・経済的な視点を持って社会実装を目指すことです。

具体的な機能として3つの場を想定しております。1つ目、創造と交流の場、議論する場、ワーキングスペースや創作スペースなどを有する場です。それから、発信と展開、発信する、地域に出向くというご意見もいただいております。そして、コーディネートの機能、他の地域につなげる、実践者や研究者につなげる。こういった役割を担う機能を想定しております。

それでは、これらの機能を発揮していくために、この展開における工夫です。本拠点自体を将来にわたって持続的なものにするために、関連する都市機能との連携などを工夫する。3つ書いてあります。

1つ目「テーマや役割が重なる施設や機能との連携」。市民活動、都市アイデンティティ、広場性などの視点から。2つ目「誘客機能などの効果的な配置や連携」。多様な人々が日常的に訪れるようにする視点から。3つ目「運営の担い手の確保と育成」。専門的人材の継続的な確保の視点から。この3つを展開における工夫として整理いたしました。以上です。

○野家委員長

はい、ありがとうございました。ただいま5番目の項目「拠点の展開イメージ」について説明いただきました。ここは、より具体的な項目になってきますので、一度、本江副委員長の方から全体的なコメントをいただければと思います。

○本江副委員長

5番で具体的なものを考えるということで、実際にどのぐらいの大きさのどのようなスペースがあるかというような話を、どのぐらい書き込めるのかということがあるとは思いますが、今の時点では、サイズ感とかは捨象して、抽象的なプログラムだけで記述をされているので、今のところはこういうことかなとは思っておりました。

いくつかちょっと注意しないといけないと思うことを申し上げますと、例えば機能のところにアーカイブとあります。アーカイブというと普通は閉架書庫みたいなものを想像して、そこにデータベースを管理している司書の方がいるという印象を持つと思うのですが、我々が議論してきたものはもう少しダイナミックでクリエイティブなことだと思います。

例えば、震災のときの思い出を語ってもらうのに初めて食べたものは何ですかと聞くとか、白い模型を作ってみんながどこでどんなふうにごろごろ過ごしていたか聞くというようなことで、体験を掘り起こし、それを形にしていく活動が、今回の震災の中で様々発明されたし、そこから作っていくみたいなのもあった。タイミングに応じてこれからもやられていかなければいけない。そういうことを含んでいることを、我々は共有していると思いますが、普通にアーカイブと書いてしまうと、そのような広がりとか可能性とかやんなきゃいけないこと、やれたこと、それを記録するということが抜けてしまうような感じがあります。同じようにシンボルという言葉もそのようなことが危惧されて、例えば大きな彫像みたいなものが建って、それがシンボルです、以上となってしまうと多

分違う。ですので、それらが持つ広がりを表すように機能を丁寧に記述しないとイケないというのが、全体的な印象です。特にシンボルとかアーカイブという言葉にはそのような危うさがあると思いました。

もう一つ申し上げますと、(2)のところの3番に「運営の担い手の確保と育成」というのがありますが、これは(2)の3番に追いやられていいことではなくて、こうした活動を行う担い手の育成は機能そのものなので、工夫ということではない。そうした人がちゃんと活動できるようにするために、都市は何をしたらいいのかを考えて実行するというのが機能だと思います。ずっと人材育成が大事と言い続けてきて、エッセンシャルなことであるので、それをやらなきゃ意味がないというように、もっと前に出して、重く位置付ける必要があるのではないかと思います。

さらにもう一つ言うと、志賀さんがおっしゃっていたし、皆さんも同意をしていたと思いますけれども、独立性が大事だということ。このことはずっと言ってきたけれども、今の資料には入っていない。独立性にはいろいろな意味があると思います。災害に関わることで、政治性を帯びるということを我々は今、目のあたりにしているので、災害の文化というのがニュートラルだというのは幻想かもしれないけれども、ある種の独立性をどう保つかということ抜きに災害のことを考えることはできないということがあるので、もしかしたら展開イメージどころではないかもしれないけれども、人を育て、そしてその人には独立性が期待されるし、それが保たれていなくてはならないというようなことが、ちゃんとうたわれなくてはいけないのではないかなと思いました。5番のところについてはそんな感じです。

○野家委員長

はい、ありがとうございます。今、3つばかり重要な指摘をいただきました。

1つは、この委員会ではシンボルとかアーカイブという言葉をあたり前のように使っていますが、これを報告書に書くと既成のイメージに引きずられる恐れがあるので、既成概念に流されないような形で、シンボルやアーカイブということを考えておく必要があるだろうということ。

それから、担い手の確保と育成というのが最後のところにあるのだけれども、これはもっと重要視すべきで、むしろこの震災メモリアルにおいて一番核になるのは、その担い手、人材の育成であって、もっと重く位置付けられていいということ。

それから、育成した人材によって担われる活動というのは、独立性、中立性ということをしきりと担保しなければならないということ。今のコロナウイルス騒ぎでもすぐに政治問題化して、なかなか独立性、中立性を保つということが難しい事案なわけです。

今、このような3つの指摘をいただきました。

他の論点でも結構です。はい、大泉さん、どうぞ。

○大泉委員

今、先生にご指摘いただいたのと同じですけれども、担い手のところ、展開における工夫の3つの項目は、委員会の議論の中で重要なところがかかなり含まれていると思います。担い手の育成は大事だし、ほかのテーマとか役割と重ねないとチャンスが薄くなるし、誘客効果なども薄いと日常的に人に感じてもらうということもできないしという点で言うと、これは工夫ではなくて、機能を果たすための前提として、位置付けるものではないかと思います。

3つともが重要ですが、順番は、③「担い手の確保と育成」が先に来て、①「テーマや

役割が重なる施設や機能との連携」と②「誘客機能などの効果的な配置や連携」が続くのではないかと思います。

○野家委員長

はい、ありがとうございました。ほかに、マリ委員、どうぞ。

○マリ委員

人が集まるとか交流できるというよりも、住民が好きになるとか、集まりたいとか、温かい気持ちになるとか、子供の声で盛り上がるとか、人の気持ちや人間らしい言葉を入れて、この場所に愛着を持ち、行きたくなるようにした方がいい。

○野家委員長

はい、ありがとうございました。今、指摘いただいたことも大変大切なことで、人間の声が聞こえてくるようなメモリアル拠点じゃないと人は集まらないし、体験の継承ということもできていかない。だから、人間が一体になって何かをする、あるいは次の世代、子どもの声が聞こえてくるような施設でありたいという、これも大切なことではないかと思えます。ほかに、遠藤委員、どうぞ。

○遠藤委員

2 ページの下のところ、新たな知恵の創造と実装のところがあるのですが、創造するための議論や、その取組みを発信するということは、研究とも関わってくると思えます。今までの委員会の中でも研究機能というようなことも出ていたかと思うのですが、この場が研究者につなげるだけではなくて、研究をして研究成果を創造し発信するという研究機能を持つことも、入れたほうがいいのではないかなと思えました。

○野家委員長

はい、ありがとうございました。それでは、志賀委員、どうぞ。

○志賀委員

書面で見ると5の(1)の2番のシンボルという言葉がやっぱり強い。私的には、そのシンボルというものが何かを既に表現し切ったものではなくて、被災の個人差に向き合うものであるといいなと思っています。

人々が訪れ、何か痕跡を残していくことができないか、自分の記憶の一部にもなるし、自分の身体を残していくようなことにもなる。しかもそれが記録されてアーカイブにもなっていくように、時間とともに現在進行形で生きているというイメージがあります。だから、そのシンボルという言葉に別な言葉に言い換えられるかなと思っていたんですけども、例えば「記憶の土台」とか「記憶の幹」とか、文学的なセンスが問われますけれども、何かユニークな言葉を使ってしまってもいいような気がします。

そうしないと、シンボルと聞いた人が「またか」となるのはとても残念。例えば「記憶の幹」とか、すごくユニークな言葉を使えたとしたら、そこにモニュメントのようなものというふうに言葉が入ってもいいような気がします。モニュメントとかシンボルという言葉はとにかく強いので、ユニークな言葉に変えた方がいいと思います。

○野家委員長

はい、ありがとうございました。シンボルというと、どうしても我々は固定的な物体を考えてしまいますけれども、そうではなくて、志賀さんの言葉を借りると、時間とともに生きていくようなシンボルであってほしいということです。つまり、これは経験や体験の継承の拠り所ということを、我々、考えているわけですから、そこで時間が止まるのではなくて、そこから新たな時間が生まれていくようなそういうシンボルでありモニュメントであってほしいということでしょうか。はい、どうぞ。

○佐藤（翔）委員

今の志賀委員と関連して、この機能のブランチにある①から④だったり、①から③で、機能という言葉がついていたり、ついていなかったりするんですね。そういう意味で揃えた方がいいと思っています。

今の志賀委員の提案は、機能という言葉をつけないでユニークな言葉にしたほうがいいんじゃないかということで、今の野家先生のお言葉の「記録の拠り所」というのもすごくいいですし、何かそういうユニークな言葉で揃えるのがよいと思いました。以上です。

○野家委員長

はい、ありがとうございました。どうぞ。

○植田委員

この(1)の4番の展示のところで、シンボルと似通う話ですけれども、展示だと時間を止めて出力されたものを見せるという意味合いに思われてしまうので、先ほどの人をつくること自体が機能だということにも関わるんですが、ここは出力してつくられたものを展示するのではなく、アーカイブのいろんな形態をつくり、つくり方自体を開示できるというようなご提案が先ほどあったんですけれども、そのような入力の場合や仕掛けとして、来た人を能動的に作業させるような仕組みを、うまく表現していければと思います。

○野家委員長

はい、ありがとうございました。先ほど、本江先生からも出たけれども、単なるアーカイブではなくて、もう少しダイナミックな要素を含んだものであって、展示も単にスタティックで過去を回顧するような展示ではなくて、そこから新たな行動が生み出していけるような展示であり、そういう展示をすれば当然それに引きずられてアーカイブも変化していかざるを得ないというようなことかと思います。

つまり、皆さんのご意見を集約すると、シンボル、アーカイブ、展示というのは、それぞれ区別して予算は取らなきゃいけないかもしれませんが、切り離されたものではなくて、活動としては一体化してお互いに錯綜した形で展開していければ、それが体験や経験の継承という形として望ましいのではないかということかと思います。

ほかに何かございましたら、どうぞ。

○佐藤（泰）委員

シンボルとかアーカイブとかは、これ自体が抽象的な言葉なので、それに対して具体的にどういう内容でやっていくのか、そこで大切なポイントは何かということが重要だし、その方向性をこの委員会で示すことができたらと思います。シンボルは、「これがシ

ンボルです」と言ってしまうと何でもありになってしまうので、そうならないためにも、具体的なイメージが湧くように言葉を添えることが大事だと思いました。アーカイブもそうです。

あと、もう一つ、(2)の③「運営の担い手の確保」ということに関して、運営というと、何かの施設や組織を運営する人と捉えられてしまうと思うんですね。

ここに必要な人材というのは、単に運営するだけではなくて、例えばプロとして継続的に研究していく人であったり、地道にいろんな資料を集めていく人であったり、いろんな活動を調べてそれをつないでいく人であったり、教育とか養成とかそういう活動に従事できるような人であったりという意味で、かなり専門性が高くないといけないと思うんです。そういう意味で、単に運営している人という言葉ではちょっと誤解を招くようなことがあると思うので、運営というのはどういうことなのか、この担い手となる人材はどのような人なのか、ということ表現できたらいいかと思いました。

○野家委員長

はい、ありがとうございました。確かに運営というと何か非常に固いイメージを与えますけれども、専門的人材として、アーカイブや展示というものを実質的にクリエイティブな形で担えるような人材、キュレーターとかアーキビストとか、そういった人たちを同時に育てていくような機能を持つ必要があるということかと思います。

それで、あと30分しかなくなったので、最後の6「今後の具体化に向けて」について、事務局から説明をお願いします。

○事務局（庄子課長）

6「今後の具体化に向けて」を説明いたします。

1番「立地の基本的要件」です。①都市のアイデンティティを象徴的に示す場であること。これは災害文化を目指す仙台市の決意や覚悟を示す。また、街の歴史を振り返り、また未来を展望できる、そのような場ということ。②多くの人が行き交う、交流できる場であること。これは市民の日常の中に溶け込む、世代を越えた継承や新たな人々の継続的な入り込みを得ることができる場ということ。③他とのつながりをつくれる場所であること。沿岸部への誘導などのインデックス性を有する、また、震災関係の他地域の施設と移動などを容易にする、そういったことをイメージしております。

想定されるエリアとしては、本市中心部のうち旧城下町エリア。歴史性や市民性の文脈、それらを含めたシンボル要素、連携拠点性、他施設との連携の可能性などから、そのように想定されます。また、現場性の強い東部沿岸地域との差別化の視点もあります。

2番「今後の検討課題」です。

①機能や具体的な活動に関する詳細の検討。②他の施設や機能との連携可能性の検討。③上記を受けた立地、形態、規模に関する詳細検討。④運営及び人材のあり方。⑤検討を進める手法。本提言の趣旨を実現するための効果的な手法など。これが今後の検討課題と想定されます。以上です。

○野家委員長

はい、ありがとうございました。「今後の具体化に向けて」では、1つ目に立地の基本的要件ということで①から③まで。また、想定されるエリアについても示唆いただきました。それから、今後の検討課題は5つほど挙げられていますが、何かこの今後の具体化の方向性についてご意見、ご質問ありましたらお願いします。

○本江副委員長

立地のところで、①②③とも、これは大変重要な施設だからいいところに置けと書いてあるわけですが、このことはあらゆる施設を考えている人がそう言いたいには決まっているわけで、この施設がなぜ特別なのかということをもうちよっと言わないといけない。いい場所がいいとみんなが言うに決まっているので、どうしてかということをもっと言う必要があります。これは全体のコンセプトに関わってくるところなので、頭に戻る話ではありますが、災害文化を持つ都市であるとうたうことが投資を呼び込むというように、この施設を持つことが仙台にどういう帰結をもたらすのかということをもっと書かなければ、いい場所につくってくれと言っても、空文になる感じがする。この施設を良い場所につくらなければいけないというロジックやストーリーを強く作り、丁寧に位置付けを書かなければいけないと思いました。

もう一つ申し上げると、この施設には、日常の中で重要な役割を果たすというビジョンがありますが、大きな災害が起きた時にどんな役割を果たすのかということについて、あまり議論していなかった気がします。日本はこれからも大きな地震が想定されていて、何ならもっと大きな被害が起こる災害の可能性があるとみんなが思っています。その時に、この東日本大震災のメモリアル施設がどんな役割を果たすのか、先駆者である我々はその時にどんな役割を果たせるのか、何かの時に役に立てないと弱いと思うので、そうしたことが検討課題に入るのかなというふうには思ったと。以上、2点でございます。

○野家委員長

はい、ありがとうございます。1つは、立地について、いい場所にあるべきと誰もが思えるようにするためには、なぜこの施設が特別な意味を持っているのかということアピールする必要があるということと。多分最初のほうでしょうかね。

それと、メモリアル施設というと過去の懐古的なイメージを持つわけですが、そうではなくて、400年とか1000年の単位で災害は確実に来るわけですから、むしろ次の災害に向かっていく施設として、今が災害と災害の間だということを感じさせ、次の災害に向けて準備するようなビジョンを含んだ施設であってほしいという、その2点でしょうか。それも大変大事なことであろうかと思えます。

ほかに何かございましたら、どうぞ。

○植田委員

さっき野家先生がおっしゃった、今は災間だと自覚させることですがけれども、なぜこれがいい場所がないといけないのかといったときに、津波記念碑などの置き場所が考えられたように、みんなの目に触れないと忘れてしまう。忘れるから、わざわざ道の真ん中につくって置いたり、昭和8年の津波記念碑を新聞社が沿岸に配ったということがあったと思います。やはり忘れてしまうから、市民にちゃんと入力される必要があるということは、一ついい場所につくってほしい理由として言えるんじゃないかと思いました。

○野家委員長

はい、ありがとうございます。震災ということのを忘れないためには一番目立つ場所において、人々の心に絶えず入力されていくということが大事だということですね。

ほかに何でも結構です。あるいは、もう時間が残り少なくなってきましたので、6に

限らず全体を見渡して、つけ加えるべきご意見あるいはこれまで見逃されてきた論点とかそういったことを、お願いできればと思います。志賀さん、どうぞ。

○志賀委員

美術館や博物館の展示は、常設展と企画展に分かれていて、常設展はその土台になるようなこと。企画展はまた意味合いが全然違います。私自身が展示を見に行くと時に思考が停止する展示などもあります。「そうか」と終わってしまい、想像を全く喚起しないことがたくさんある。今回は、そうではない展示を目指していかなければいけない。

展示室にわざわざ身体を運ぶということは、360度の知覚をもって体験することになるので。それは、例えば、見えないものを可視化することであったり、言葉などでは表せない複雑なことや他者の立場に立つそのようなことを体験するようなこと。

複雑なことをできるだけ複雑なままに出して、展示の中で想像を喚起することが可能になったときに、展示そのものが何かに対する抵抗のような力に働いたとしたら、結果的にインディペンデンスを持つことにつながる。だから、ソフトからインディペンデンス性というのはつくっていきけるんじゃないかと思う。

つまり、展示の場というのは思考の場、考える場であってほしい。コントロールするというのが行政の場所だし、そこからはみ出たもの、コントロールしきれないものとかを展示の場が受けて、展示することでインディペンデンスにつながっていくと考えると、ここも文学的なセンスが問われますけど、展示もユニークな言葉を使う方がいいような気がします。

そうなったときに、今後この施設が現在進行形で起こったハザードにどう対応していくかとなると、その場がどういうふうに公共性を持つか、公共とは一体どういうことかということも当然考えていかなきゃいけない。せめぎ合いだと思うけれども、この場が作り出す独特で、ユニークなモラルや公共性のようなことが、展示の場に思考とともに出てくるといいと思います。

○野家委員長

はい、ありがとうございました。今、展示ということについて大変想像力をかき立てるようなご発言をいただいたと思います。単なるスタティックな展示ではない。見えないものの可視化、複雑なものを複雑なままに展示するという言葉も出てきました。ありがとうございました。

ほかに何かございましたら。はい、遠藤さん。

○遠藤委員

全体を通して、災害文化の後にどういう言葉を持ってくるかというところですが、例えば3ページの6番の(1)の①ですと、「災害文化」を目指す仙台市と書いていただいて、戻って2ページの一番上の(2)キーコンセプトの中では、災害とともに生きる社会のあり方及びそうした文化を持つので、ここを災害文化なのかなと思って私は読んでいたんですけども、そういった文化をもう持っているというふうに表現している部分があったりします。場合によっては、持っているともまだ言い切れず、文化が濃い地域もあれば全然もう記憶すらないところもあったりもするんじゃないかと思ったりしますので、災害文化を育みたい言葉が合うのではないかと思います。

今日の資料でそういったところを考えていたときに、仙台市の他の委員会で私が拝見した市民調査のデータがあったので、それを皆さんにご紹介しますけれども、仙台市が

行った防災に関する市民意識アンケート調査報告書の抜粋で、災害への備えに対する取組みの割合というデータがあります。震災後はいろんな要素がグッと上がるわけですね。家族との連絡方法を決めるとか避難の経路を決めるとか飛び出し防止器具をつけるとか耐震化をすとか。それが、2019年度の調査になるとかなり下がっています。

そうすると、災害の文化というのは、一旦震災が起こって、過去の文化からさらに災害文化が高まったと言えればいいんですかね。でも、それはガクッと下がって、もしかしたら来年も下がるかもしれない。そういったときに、仙台はもう災害文化があると言い切っているのだろうか。どういうふうに災害文化の後に言葉をつけ加えて表現していけばいいのかと考えておりました。なので、少し皆さんのご意見も聞けたらなと思いました。

○野家委員長

はい、ありがとうございます。今、災害文化ということについて、9年、10年経つうちに持続の難しさが出てきているので、災害文化の後に何か続く言葉を探すことで、それをもう一遍持続させていくことが重要だというご指摘で、そのとおりだと思います。はい、佐藤委員。

○佐藤（泰）委員

記憶を大切にすることというのは大事だけれども、すでにある記憶だけを拠り所にして災害文化をつくっていくのではなくて、仙台だけではなく、人類共通の課題として、これから起こる自然現象によって我々が失うかもしれないことについて考えていくのが、仙台で取り組み、発信しようとする災害文化の重要なポイントだと思う。

次の災害は明日かもしれない。仙台に限らず、どこかの地域で明日起きるかもしれない状況は間違いない。そのことについて仙台が常に考え発信し続けることが重要な使命なのであって、施設ありきで考えるのではなく、未来と世界に向けて重要なメッセージを発信し続ける仙台での活動を支えるために必要な環境として、施設や場の問題は位置付けていただきたいと切に思います。

○野家委員長

はい、ありがとうございます。これもまた重要なご指摘をいただいたかと思いますが、時間が残り少なくなってきましたが、今日言い残したこととかあるいはつけ加えておきたいことがあったら、是非お願いします。はい、マリさん。

○マリ委員

海外からの視点で見ると、もっと国際的なことを言ってもいいと思いました。特に、2の(1)の①の様々な災害のこととか、2の(2)の③④の東北の役割とか、災害が機会になった発信というより、全世界唯一のものが仙台にあるとか、全世界からの仙台が窓口になるとか、東日本大震災が今まで外にないものだからとか、本当に全世界の特別さを入れてもいいかなと思いました。

○野家委員長

はい、ありがとうございます。これも重要ですね。国際性をこの拠点の中にどう盛り込んでいくかということ。それから、もう一つ、さっき言い忘れましたけれども、志賀さんが言った公共性ということ。これも国際化と並んで、この拠点が持つ役割として

重要なことかと思いました。

ほかに何かございましたら。はい、どうぞ。

○佐藤（翔）委員

今のマリ委員に関係しているところですけども、世界の視点というのと、あと前回の振り返りの資料1の部分ですけども、特に大きな1番の(3)だと思うんですが、海も山も川もあって、様々な災害が起こり得るということで、東日本大震災のことを振り返っている部分もあれば、そこから先を見ている部分もあると思うと、震災という言葉だけじゃなくいろいろな災害ということも入っていてもいいのかなと思いました。

震災メモリアル拠点なので、東日本大震災が目立ってしまうのはあるんですけども、この10年だけ見ても災害が激化・多発化しているという文脈が前提になって、他の災害についても前向きに考えますということがどこかに入っているとありがたいなと思いました。以上です。

○野家委員長

はい、ありがとうございました。はい、志賀さん。

○志賀委員

災害文化というものの拠点だとして、今、私の心の中に何が一番あるかという、不安の気持ちです。今のコロナもそうだし、これから起こることもそうだし。そうすると、問題は、心・精神の問題になって、それが展示とかに回収されていくかなと思っていたんですが、展示は見てそこから想起して思考していくものなので、もしかしたら違うかもしれない。

先日、震災から9年目にして初めてその日の夜に悪夢というか、すごく壮絶な夢を見て、こんな夢見がこんなにも遅く来てびっくりしました。子供たちは震災から年月が経ったのちにトラウマが来たりとか、と聞きますよね。やっと我慢していたものが何年か経って出てきて、しゃべれなくなった子がいたりという例をたくさん聞いたりすると、現在進行形である不安な心、不安な精神というのはこの拠点の中にどう入るのか。それは難しいことだと思うんですけども、今の不安なことに対してどうなのか、今のざっくりとした不安というのはどのハザードによるものなのか、自分自身なのか、社会なのか、錯綜する情報からの影響なのか。過去のハザードのせいなのかという混乱がある中において、この拠点が心・精神にどう向き合っていくのかと思いました。

○野家委員長

はい、ありがとうございました。そろそろ時間が来てしまいましたが、最後、副委員長から、簡単にコメントいただけますか。

○本江副委員長

志賀さんがおっしゃった不安のことはすごく重要な話で、災害文化とは何かというのが一貫して話題なっていますが、防災のための生活のノウハウ程度のものではないということです。災害とともに生きるとはどういうことかということを含むような大きなコンセプトであって、それを都市の問題として扱い、考える場をつくりましょうと言っているわけです。だから、よくある震災を忘れないための施設とは大分違うことを我々は言っています。言いながらも「仙台市さん、本当にやるんですよ」と繰り返し思う

わけですが、でも、そういうビジョンをこの委員会の骨子の中では言っているということも、改めてそうだなと思いました。

ここで紹介しようと思って本を持って来たんですけども、「〈災後〉の記憶史」という本が最近出ました。これは社会学のメディア、基本的には新聞の研究の本ですけども、示唆に富むものがあるなと思って持ってきました。どうして伊勢湾台風のことは忘れるのに、震災だけが特別なマイルストーンになるのかみたいなことも書かれていて、結構面白いと思います。

この中に関東大震災がありました。1924年と30年に復興まつりが行われて、それ以降復興は済んだことになって、震災が大変ということはもう新聞には載らなくなって、時々思い出したように「関東大震災のことを忘れてはならない」、「忘れていませんか」と新聞に出るそうです。

メモリアル施設を「忘れていませんか」と時々言うための施設だとすると随分小さな役割で、単純に覚えておくとか、時々忘れるなと警告するだけの施設を越えて、大きな災害の文化をつくる、あるいは持つ、そのようなものないんじゃないかという話もありましたが、それを引き受けていくような場を機能としてつくるという話が入っているというのは非常に志が高くて、それは骨子から外せないなと思いました。

もう一つは、人の話を何度かしましたが、誰がどんなことをするのかというのが、ちょっと抽象度が高くて、まだちゃんとわからない。特に、5番の機能のところ、こういう場所があるというのをもっと具体化しないといけない。市民が様々な活動をしやすと言うだけだと、ものになっていかないの、そこにどんな人が集まって何をするのかというイメージを、具体的なシーンとともにこれから考えなくてはいけないのかなと思ったところです。以上です。

○野家委員長

はい、ありがとうございます。議論が深まってきたところですが、残念ながら時間が参りましたので、本日はここで区切らせていただきます。事務局には今回の議論を踏まえて報告書の素案をまとめていただきたいと思います。その過程で、私や本江副委員長はじめ、必要に応じて各委員の方々に意見を聴取しながら進めていきたいと思っておりますので、よろしくご協力のほどお願いいたします。もし、今日言い足りないことがあればメールで全員にまわるような形でご提言やご意見をいただければと思います。

それでは次の議事に入ります。2番目「今後のスケジュールについて」です。事務局から資料に基づいて説明をお願いします。

○事務局（庄子課長）

はい、「今後のスケジュールについて」です。本日第7回検討委員会で骨子を検討しました。次回の日付はまだ確定しておりませんが、5月に第8回検討委員会、その後3~4回の検討委員会を経まして夏から秋くらいが最後の検討委員会で、12月くらいまでに基本構想を策定したいと考えております。なお、市民意見の聴取、パブリックコメントについては別途調整ということで、次回のスケジュールに入るくらいにしていきたいと思っております。なお、議論や検討の進行状況により、全体のスケジュールは柔軟に対応したいと考えております。以上です。

○野家委員長

はい、ありがとうございます。ただいま説明がありました件につきまして、何かご質

問、ご意見ありますでしょうか。よろしいでしょうか、それでは3「その他」ということですが、事務局からございましたらお願いします。

○事務局（庄子課長）

はい、それでは事務局からです。次回の日程に関しては、さきほど申しあげましたとおり、5月の開催予定ですが詳細な日時・場所につきましては追ってご連絡いたします。

○野家委員長

はい、ありがとうございます。委員のみなさまから何かございましたら。よろしいでしょうか。では事務局に進行を引き継ぎますので、よろしくをお願いします。

○事務局（福田局長）

長時間のご議論ありがとうございました。検討委員会も今回で7回目ということで、骨子案の検討まできたところですよ。毎回深い議論をしていただきまして、大変ありがとうございます。今日も様々なご指摘をいただきました。次回の準備を進めてまいりたいと思います。これまでの議論に感謝申し上げたいと思います。以上で本日の委員会を閉会とさせていただきます。

また、この場をお借りまして、報告させていただきます。4月1日の人事異動で私まちづくり政策局を離れることになりました。これまでみなさん大変お世話になりました。後任は隣におります次長の梅内が引き続き担当いたします。室長の高橋、担当課長の庄子も異動となりまして、4月から新しい体制で事務局務めさせていただくこととなります。これまでありがとうございました。引き続きよろしくお願いいたします。本日はありがとうございました。